



明治・大正期の活版印刷工場

『明治から』

(1) やくざ旅姿

史談会開催日

昭和42年(1967年)3月27日

■ 語る人

高橋 与作 氏
(正進社印刷所社長)

江森 八十吉 氏
(江森印刷所社長)

■ 【高橋 与作氏略歴】・

- ・ 明治27年6月神奈川県に生れる。横浜吉岡町私立上田塾3年修了。各印刷工場を経て大和印刷取締役営業部長の後、昭和6年正進社印刷所創業、23年株式会社に改組、社長に就任、現在に至る。
- ・ 昭和24年東京協組初代理事長、任期中に日印工副会長2回、専務1回。29年辞任後東京調組顧問、印刷健康保険組合顧問、東京家庭裁判参与調停員を歴任。
- ・ 昭和30年実業精励者として知事より表彰、31年黄綬褒章、40年勲五等瑞宝章を受章

■ 【江森 八十吉氏略歴】・

- ・ 明治32年横浜に生れる。14歳で横浜毎朝新聞入社、以後貿易新報社、丸利印刷会社、国文社国光印刷などで活版印刷一筋に進まれた。昭和10年横浜に江森印刷所創業、現在に至る。

昭和22年神奈川県印刷協同組合理事長に就任。現在は神奈川県印工組顧問、神奈川県職業訓練所印刷講師を務められる。

高橋：申し上げるまでもなく、新聞などでご承知のように、今年
は明治百年ということで、数えてみますと私の年に26を足せば丁
度百年になるわけです。60年の私の歩みも印刷業界そのものの歩み
の様に辛苦の道であったが、明治時代の活版印刷工場の様子や風俗、
習慣というものも忘れられ、記録が無いのが残念です。ここにおら
れます方々は私よりも先輩の方ばかりで誠に恥ずかしい気もしまし
ますが、そのような理由で、百年にはちょっと足りませんが“印刷百年”
の補足ともなるよう、私が経験したことを語っておきたいと思いま
す。

私は明治27年、神奈川県厚木の在、愛甲郡という貧村で生を受け、
そこで4年制小学校を中途退学し、横浜へ出て3年間ほど上田塾で
勉強したわけです。印刷界へ入ったのは15歳の5月15日、ちょう
ど横浜大神宮の祭りの日だったんです。横浜の大橋活版所という所
だったんですが、そこはいたって変人が揃っているところで、看板
なども逆に書いてあるような始末でした。入った時の日給は12銭、
そうひどく安いということではありませんでした。残業は毎日10
時頃までが普通で、10時までやると蕎麦が一杯出て我々にとっては
それがまた楽しみでした。

3年ほどそこでやりましたが、そこでの仕事は何かというと、朝
はまずランプ掃除から始まる。次にハンドのインキつけをやるんだ
が、ハンド引きとインキつけと2人でやる重ね刷りで、それが印刷
工としての修業の第一段階でした。1日に5千枚ぐらい刷っていま
したが、普通にやって今でも1万枚ぐらいですからね。

その次に何をやるかと言うと、フートプレスですね。フートプレス、
足で踏んで手で差してとるという八裁判ぐらい、今のB4判の機械で、
仕事姿は手甲をはめ、脚絆をつけやくざの旅人の姿と同じで、一本

差がないのが違っているぐらいでした。今考えれば、3人前ぐらいの仕事をやっていたでしょうね。

ハンドのインキつけで印刷のほうは免職になりまして、文選もやり、植字もやるようになった。その前にロールもやりましたが、ロールは電気がないから手で回していました。これには呼吸が必要で、胴に接触する時には両手で、接触しない時には片手で回したものです。ロールの運転は別にいて、力の強いのがやったんだが、食事は特別に1日4回許されていました。このロールの運転は忘れられないですね。

電気が来てからは、ひとりで廻る機械が活版社に入ったらしい、という事で見に行こうということになったが、秘密らしいし、捕まると大変だからと、そっと覗きに行ったこともありました。その様な段階を経て今度は植字工になったわけです。

植字工になって、少しませていたと思うんですが、20歳の時、横浜の名門、大川印刷所へ勤めさせてもらったんです。そこで2年ほど勤めていましたが、その時に兵隊検査を受けたということもあって、自分では1人前のつもりでいたんです。ところが私のすぐ横へ入ってきた植字の工員がいたんですが、その人は東京から来ていて非常に速いんですよ。これはどうも東京に修業に行かなければ駄目だと思い、大正4年8月、21歳の時東京に出たわけです。

(2) 武者修行

高橋：さて東京へ行ったものの、東京は不況で何処へも入れない。大正4年のことです。懐がとにかく淋しいものだから、方々歩くと言っても電車に乗って歩くということが出来ない。電車は早朝割引で往復7銭、それにも乗れないで、天現寺から深川まで2時間もかかって歩いたものです。それであちこちの印刷所を、何とか入口がないものかと歩いたんですが、これが当時の職人職員の普通の姿でした。

方々を訪ねたけれど何処にも入れない。木賃宿に泊っていてだんだん持ち合わせの金が乏しくなってきた、内職でもやらなければならんと考えたんです。一つ納豆売りでもやってみようと納豆屋に聞いてみたこともあります。そうしたら、納豆を売ってもいくらにもならないし、手に職を持っているんだったらそれを貫いたらほうが、と逆に意見をされたりしました。それで思い直してまた毎日



毎日探しに歩きました。その時、木賃宿で私の隣にいた寄席の三味線ひき、吉田さん夫婦に「毎日出かけているようだが、職は何だ」と声をかけられたんです。「実は私は活版の版を組むという腕をもっているのだが、勤める場所がないので訪ねて歩いている。郷里の親からも金の援助は受けていないので懐は淋しいが、自分でやってみようという決心をしている」と、身上話をしたんです。そうすると、それだけ覚悟しているんだったら、君が職につくまで俺たち夫婦が面倒をみてやろう、と言ってくれたんですね。有り難くて、本当に涙がこぼれました。それから残っている金を吉田さんに全部預け、その日その日の電車賃と弁当代を貰って職探しに出かけたわけです。

そんな苦勞をして1日1日と過ぎて行きましたが、ある所へ行った時、こんなことをして探してもおそらく駄目だろう、ということ言われて、秀英舎へ行ってみると言われたんです。しかし秀英舎というのは日本一の会社なんだから、私なんかは恐ろしくて行けないと尻込みしていたら、そんな了見じゃ駄目だと後から押されて稲葉さんという植字課長に会ったんです。「21で植字が出来るかねえ、うちには一人もいません」と稲葉さんは言っていました。当時秀英舎には57、8人の植字工がいたそうです。「植字が駄目なら、差し替えでも何でもやらせてみて下さい」と頼み込んで、じゃ来てみる、と言われた時はうれしかったですね。吉田夫妻も自分の兄弟のここのように喜んでくれました。

翌日から勤め始めました。中山さんという麻布で貸本屋を内職にやっていた人が私の隣にいたんです。その人がやり方を教えてくれたりしました。初めにやらされたのは学校の作文集でベタ組だから簡単で夢中で組んでしまったら、中山さんが言うには少し組み過ぎたから、植字台の下に隠しておけと言われ、翌日の差し替えの分にしたりしました。その月一杯勤めたら採用になり、工手の称号をもらいました。それは全く横浜の大川さんのお陰だと感謝しました。

秀英舎でまる2年修行しました。私はその頃、小田原町に下宿していたんですが、その下宿に35、6の婦人が訪ねてきて、神田淡路町の文進堂というルビつきの専門工場に来てくれないか、と言うんです。私は経済関係の数字ものなら得意だったんですが自信はないと言うと、あなたなら出来るというので、武者修業のつもりでやってみよう決心したんです。その時、誰が一体私をそこに世話したのかと婦人に聞いたんですが、その婦人はそれは自然に判るから今は言えないと、どうしても話してくれませんでした。



(3) 知己五十年

高橋：神田の文進堂は組版専門で、機械はハンドが1台あってそれで校正刷りをするぐらいでした。植字は私のほかに3人いて、いずれもルビつきの仕事をやっていたんだから私より速いんですよね。こっちは飛び込みですから、半分くらいしか出来ませんでした。数字に慣れているから拾うのは簡単なんだが、やはりルビつきをやるには活字に対する理解が相当なければ出来ません。そうして修行していましたが、文進堂は日曜にも出るんで、その日曜に来た人があったんです。その人が私を文進堂に世話したんです。それは秀英舎の解版課長で、この人の紹介だったんだなと思ったわけです。その人はルビつきの名人で、日曜日に出てやるだけでも、人並み以上の仕事をやってしまうんです。ひとつこの人について覚えようと思ったんですが、他人に教えるというようなことをする人ではなく、自分で勝手に習うよりしようがなかったんです。3ヶ月ぐらい経って他の植字工とほとんど同じ程度の仕事が出来ようになりました。

修業はやはり熱ですから、熱心というものがあさえすれば、一定の段階に達するものだということを、私はつくづく感じました。その様に修業して、どうやら一通りのことが出来るようになりました。そこで文字拾いとルビつきの仕事が出来ようになったんですが、植字にしても何にしてもそういうふうの一つずつ進んでいくのが行き方ではないかと思います。その後も相当歩きました。現在の工場を作る前、横浜の大和印刷に植字課長として入りました。その頃には仕事もどうやら満足に出来るようになっていましたから、楽々と仕事をしました。しかし、昔の仕事は今と違って厳しかったということを感じます。とにかく2日間寝ないで仕事をしたこともあります。2日寝ないと活字の大きさが違って見えるんですね。今の人たちはそんな馬鹿なことが出来るか、というのですが、当時は私ばかりでなく幾人もそういうことをやった職人がいました。

そんなことでどうやら一人前に仕事が出来ようになりましたが、その後の事は自分で仕事を始めた話になってしまいますから、この辺で江森さんに引継ぎましょう。江森さんとはお互いに植字と文選で日本一になろうじゃないかと約束した間柄です。

江森：私は仕事を通して吉川英治さんの歴史書などから学びましたが、この人の歴史書をみますと、歴史家というものは事実をあくまでも追求して、それを体系化するというを言っています。私も自分の事で自慢になるのではないかとちょっと心配なんです、出来る限り事実談としてお話したいと思います。



実は高橋さんは明治27年、私は32年生れて、5つ私のほうが若いわけです。それで今、高橋さんのお話を伺いながら、いつ高橋さんと知り合ったか考えているんですが、どうもはっきりしないんです。

私は学校がクリスチャンの学校でして、先生に言われたんですが、お前はうちの学校としては特別の人間だ。いたずらはするけれども努力もする、と言われ、高等小学校も卒業するんだな、と期待されていたんだが、実は5年の中途退学なんです。それで13から14歳にかけてブラブラしているうちに、近所に印刷工がいて行って見ないか、と言われて親に相談したらそんなものに行く事はないと反対されましたが、どうしても行くといことで押し切ったんです。

(4) 羽織とマント

江森：その町工場は1日13銭でした。さっき高橋さんは12銭と言いましたが、私が入ったのは5、6年後ですから1銭高くなっていたのでしょう。そこではさっきもお話がありましたが、ロールの紙取りの前でインキ付けをし、名刺を刷っていました。名刺を4面かけるんですが、達者な人は一遍に6面かけちゃうんです。それで紙も今のように4号型だけでというんじゃなく、色々な種類があるもんですから、手に挟んでやったものです。ローラが上手いかずちょっとでも触れると飛んでしまって、ひっぱたかれたですね。一生懸命やりました。ところがどうも職人の品も良くないし、暇を見つけて文選に行って文字を拾ったり、版を見ているものだから、そのうち植字に回してやるから、となだめられたものでした。翌月14銭になり、3ヶ月目には16銭になりました。その16銭になった時、たまたま有名な文字堂という会社で、手取りの紙取り工がいなかったから来いということになって、早速行ったわけです。文字堂へ行くと16銭から5割上って、24銭になりうれしくてしょうがありませんでした。しかし、4人がコンクールみたいに競争してやっていますから、一年も経たない私はとてもやっていけない。それで何度か逃げ出そうかと思いましたが、ここが辛抱のしどころだと頑張ったんです。けれどもあんまり品が悪いので、これは僕は文選から植字になったほうがいいと思いました。当時のロールが大体60銭から65銭、植字が80銭と言われていた。文選はやはり60銭ぐらいでした。家が貧しかったものだから、厚い手当のほうがいいと思い、文選から植字へ行こうと思ったわけです。



その頃、東京へ行った先輩が、東京へ来いと声をかけてくれました。その時分の「東京」というのは、新橋から桜木町のことを言っていたと思うんです。で、横浜からそこまで出てくるというのは大変に思われ、まるで水盃もののように感じました。洋服などありませんから、裕を二枚重ねて着て、羽織を着、その上にまたマントを羽織って出かけたんです。そうしたら、悪い奴がいてマントを着ているんだから、羽織と裕を借せといわれて盗られてしまいました。東京へ出てきて、今の蔵前国技館あたりじゃないかと思うんですが、浅草・河原町という所に栗原さんという小さな印刷屋があって、そこへ5、6日お世話になりました。金はすぐくれるんですが、皿のような丼のご飯が1銭、御付けが1銭とられるんです。食欲が盛んですから、ご飯3杯食べて御付け2杯飲めば適量なんですけども、5銭かかるんで時には御付け1杯にご飯2杯で我慢してやっていました。しかしなかなか良い口が無いものだから、また横浜へ戻りました。

ちょうどその時、大正2年から3年にかけてですが、毎朝新報にルビ付き活字が初めて入ったんです。それでルビ付きを習いたいと思って入ったんですが、最初はなかなか仮名のふりがたが判らない。9時始まりなのを8時に入れてもらって、前日にもらった原稿を拾いました。その時ちょうど文選長をしていた人で、東京毎日新聞の文選長から職長になった田代という人がいました。私はその人に色々聞きました。「親子」とあるそうですがどっちのふり仮名をつけるんですか、と。「小説やっているんだったら『おやこ』だ。『しんし』は皇室関係だけだ」と言われたり、「後継内閣」を「あとつぎないかく」とつけて怒られたりしました。そんな風に指導を受けて、16歳の3月には17円頂きました。当時一級の文選は17円50銭でしたから、有り難いものでした。

(5) 邂 逅

江森：そのようにして励んでいましたが、その後に「横浜で江森は相当出来るけれども、東京の本舞台を踏んでいない、行ったけれど口がなくて戻ってきた」という事をあちこちで言われたんです。そこでルビ付きの第1期卒業生というようなことで資格をもらって、東京へ来たわけです。ところが丁度その時、弟が生れて、母が46歳の時の子供ですから恥かきっ子ですが、生れたものですから親戚の者なんかが帰って来てくれ、と言うんです。それで1年くらい戻りまして17歳の時再び東京へ来たんです。高橋さんも武者修業ということを言われましたが、私も修業で随分歩いたものです。今の

西銀座の国文社、築地の国光社、それから鈴木町にあった東亜印刷、神田の丸利印刷などがありました。神田の丸利印刷では三宅雪嶺の雑誌「日本及日本人」の原稿を拾ったこともあります。また築地には川崎活版というのがありまして、そこを一時助けていたことがあります。その川崎活版で植字をしていた私どもの先輩に、矢田部という人がいました。その人は木挽町2丁目14番地に住んでいましたが、そこで偶然にも高橋さんと私ともう1人、今も横浜にいる人の3人が同じ部屋に下宿したんです。6畳の座敷で4円50銭、一人1円50銭ずつ払っていました。ところが名前を出しては悪いので言いませんが、その男が食い詰めてツラかっちゃったんで、2人で2円25銭ずつ払った覚えがあります。

そこで感ずるのは、人間の一生というものは自分が立派な人にお目にかかったのを知るか、知らないかによって決ってくるということですね。私は印刷界にあって理事長にもなって、県下の印刷業者の方に色々迷惑をかけたと思いますが、やはり1人の偉大なる徳望をもった人が高橋さん、それから知性も高く非常に品位が高潔な人が大川重吉さん、この2人は私にとってどうしても忘れられない人です。今でも何事かあって深く考え込むと、どちらかの人の姿が現れてくるんですね。私は非常に恵まれていたと思いますね。親鸞上人は29歳の時に法然上人に出会った、仏教では「邂逅」というものですが、それに比べるほど私は偉くはないんですが、やはり自分に優れた人がついていてくれたからこそ、こうして大過なくやれたんだと思うんです。

目の前にいる高橋さんのことは言いにくいんですが、交友は51年目に入ります。東京と横浜の関係で一緒になるということもあまりないんですが、家の者が結婚するといえば媒酌をお願いしたりで、お世話になりっぱなしなんです。やはり大きな包容力と徳望にどうしても頼ってしまいます。私も罔々しいものですから、高橋さんに向かって「あなたには数々お世話になっていますが、どうも返せない、返せないほうが良いと思う、僕が恩を返す時はあなたが落ちぶれている時だから」と臆面も無く言うくらいですが、これだけの事を言えると言う人は世の中にやっぱりいないです。それから大川重吉さんという人は戦後、私が統制組合から協同組合を作る時に専務理事をやっていたんですが、印刷組合の本部の人達が話している時に、たまたま新憲法によって貴族という制度がなくなる、という話になったことがあります。印刷界で貴族と言えば誰だろうな、ということに及んでいって、何かの名前が出たんです。その中に神奈川県の大川さんが入っていたことで私はうれしかったですね。



当時の印刷界のことですが、日本の印刷界というのは京橋と神田だということで張り合っていました。文選工同士も銀座の者（レンガの者）は神田に負けちゃいけない、神田の者はレンガに負けちゃならないということで張り合うものだから、必然的に能率を上げなければいけないようになっていました。

(6) 小粋なロール

江森：私が国光社にいる時のことなんですが、その文選長に篠原某という人がいました。冬でもなんでも朝は7時に始まりとても通勤が困難だからというので、高橋さんに相談して木挽町2丁目14番地の下宿に泊って貰った事がありました。その人が私に非常に目をかけてくれて、色々指導してくれました。朝がとにかく早いものですから、行くと入口の16燭の電球で手を暖めているんです。ストーブはひとつしかなく、文選長の側に置いてあって、広い文選場には20数名もいてとても熱は伝わらない。それで電球の熱で手を暖めてやっていたものです。

当時の活字はポイントというものがなくて、5号、6号というふうに号数で呼んでいました。それで大体午前中に10箱、午後10箱を拾っていました。

その次行った国光社では、漢字というものを覚えました。というのは官報をやっていた関係で、漢字には非常にうるさくて、そういう関係から漢字に対する認識も知識も深くなって、正字と略字と俗字を知る様になりました。それからルビのふり方もだんだん覚えて仮名の頻度表というものもそこで覚えたわけです。国文社は文選に40名くらいいましたが、私は生意気の盛りでハンティングをかぶって行ったもんです。それで「横浜のシャッポの兄貴」と言われました。帽子をかぶったままで仕事をするのがまた粋なように感じたわけです。

しかしどこへ行っても、自分がどうしても敵わない人というのはいるもんで、国光社では金子という文選工がいて、その人は文選長に許してもらって活字1箱と空箱2、3箱借りて、自分の家の3寸5分の柱に釘を打って活字をのせて練習をするんですね。これにはビックリして私は上には上があるもんだなどと感心したわけです。

そのうち横浜にルビ付き文選が払底してしまって困ったというこ

とで、横浜へ戻ってやっていたら、今度は国文社の方から君がいなくなっ
て淋しいから、君の目に叶った人を2、3人来てくれ、と言われたときは嬉し
くて、人生やはり意気に感ず、でお金でなくて自分を認めてくれた」人が
いるということは本当に有り難いものです。

それからさっき高橋さんもお話になりましたが、「手甲脚半」のことを少し話
してみます。私は6年ほど前に「印刷界の今昔物語」という本を書いた事
があります。その中からこの「手甲脚半」に関するところを少し読ませて
頂きます。印刷業の普及時代「明治の文明開化は第一次世界大戦（大正
3～7年）の直後がその改元期で、わが業界の第一次発展期で、印刷産
業がこれまでとは異なり広く普及された一時期と言えよう。文房具で
知られた文字堂が南吉田へ移転拡張したのもこの時期であり、その他一
様に繁栄した。

当時ロールマシンはあおり式でなくほとんどが手取式で、その機械は坊
主の号で呼ばれ、それを操縦する職人のことをアトヤと呼んでいた。フ
ートは全盛期でどの工場にも備えてあり、丸利印刷所などでは、ロー
ルよりフートのほうが機数も多く、また動力が不十分なため、足踏式
が活躍し、それを操縦する職人は脚絆をつけて働いた。手巾というも
のはあまり無く、ハンドも1枚刷、2枚刷と呼ばれ大いに活躍し、2
枚刷ハンドなどは名刺を一度に4面、6面かけてインキ付けの少年工
を助手に、手甲掛で身振り、腰振り面白く振舞っていた。そのハンド
も時代の推移により、ロールとフートに職場を蚕食され、ハンド引き
の職人もロールやフートに職場を転換した。その頃はやった歌にこん
なものもありました。「粋なフート、小粋なロール なぜかハンド
引き まぬけづら」

(7) 支 柱

江森：高橋さんもよくご存知でしょうが、宵の口に残業がないと、早
めにお湯に行ってシャワーを頭からかぶって頭を冷やせと命令した
ことがありました。というのは、国文社にいた時、原銀次という人が
いて、この人をどうしても負かしたいという気持ちがあったんです
が、1日に23箱ぐらいやっちゃって、どうしても追いつけないん
です。その人がいなければ一番になれるんですが、どうしても2
番なんですね。それからもう1人、生徒に岡田というのがいて、こ
れがまた早いんでどうしても1番になれませんでした。それで、30
分以上遅刻すると閉められてしまっ
て入れず、休みになるんです。
そんな厳しさもありましたから
ね。今そういうふうな事をいうと、



監獄部屋のようなことを思うでしょうし、搾取されているというようなことを言いますが、明治から大正にかけての興隆期には人々がすべて希望に燃えていた感じがしますね。

「中国や日本における木版印刷による昔の学問や振興の普及、あるいはヨーロッパでは活版印刷が発明されて以来の振興や学問、文芸の復活などは、印刷術が人類に与えた偉大なる貢献を物語っている。ことに文章を複製する手段として最も威力のあった活版印刷の発明は、ヨーロッパの人々を暗黒時代から解放し、ルネッサンスの武器隣、輝かしい近世への糸口を作る上に大きな働きをした。さらに機械文明の時代を開いた19世紀に入ってから後、印刷術はこの近代文明を推進し発展させていく上に功績は大きいものである」

これは神奈川県職業訓練所で使用した教科書の一部ですが、これと関連して私が非常に感激したのは、今から12、3年前に天野貞裕さんが「人生読本」という本を出しましたが、これにはこうことが書いてある。—「人間は考える存在者である。考えない人間とは泳がない魚とか、飛ばない鳥と同じ様に、その存在を考える事が出来にくい。『人間は考える葦である』とか『考える事が人間の偉大性である』とかいう有名な言葉のあるゆえんである」「思考の結果である思想は精神の客観的な表現である。精神の言語による客観的表現を文字を媒介として理解する道がすなわち読書である。私たちは読書によって、古代の思想家とも他国の詩人とも、時代を超え、国境を取り去って親しく交わる事が出来る。

私たちは多くの偉大な発明の恩恵を被っているが、ヨハン・グーテンベルグの活版術の発明のごときは、その最たるものであろう。この発明こそ人類の誠に比類なき祝福であった。グーテンベルグこそは、いかに賛美してもなお足らざる人類の恩人と言わねばならぬ。彼の天才的創賢と苦心惨澹たる拮据清栄との成果は、彼個人の成功にとどまらずして、人類の一大成功として世界的、人類の事業であった」。

これを見た時に、大袈裟ですが私は身震いするほどうれしく感じましたね。こういうことが私をずっと支えてきた様に思います。

高橋：最後にひと言申し上げたいんですが、榎本丹三さん（文祥堂会長）がお亡くなりになる前にちょいちょいお伺いしましたが、その家には掛軸があって「冥土からもし迎えが来たならば、百歳までは留守と答える」と書いてありましたが、良い言葉と思って記憶してきました。この言葉を銘記なさって、どうぞご壮健でいらして下さい。ありがとうございました。

